

「新しい人権」と沖縄」のための フィールドワーク

組原 洋

まえがき

本稿は、題名から分かるように、「新しい人権」と沖縄（沖縄大学地域研究所年報第4号）を書く準備として、1993年1月11日に脱稿したもので、内容的には、同題で行った講演（92年10月24日）をするために行った2つのフィールドワークについて記したものである。年報の原稿が多くなり過ぎたので、フィールドワークの一部は別にしたのである。

そういうことで、もともとは、年報第4号に続いて発刊された、同研究所所報の前号（第7号）に載せてもらうつもりだったが、今号になったため、結果的には原稿のまま1年余り寝かせておくことになった。この間に、特にIで記したことに関しては相当な変化が見られる。周知のように不況が長引いて、企業が日系ブラジル人の雇用に積極的ではなくなっているためである。しかし、また一方ではサッカー熱との関係でブラジルとの新たな交流が見られるようで、マウロ先生たちもこれに関与しているとかいう話だが、こういったことについてはまとめて別の機会に譲ることにしたい。

なお、本稿Iの冒頭に記した「移民の証言（ブラジル）」は、「沖縄発～平和へのメッセージ第3回平和学習講座集録一」（那覇市中央公民館・1993年）の中で、すでに活字になっている。

（1994・2・19）

I 日系ブラジル人労働者の実態

宜保マウロ氏とは、1984年にポルトガル語を教わって以来のおつき合いである（その関係もあって、今でも「マウロ先生」と呼んでいるので、ここでもそのように呼ぶことにする）が、そのマウロ先生が、92年7月15日、那覇市中央公民館の第3回平和学習講座の第6回目、「移民の証言（ブラジル）」で話されることとなり、私がおのころコーディネーターをつとめることになった。そこでその準備のため、同年5月17日と18日、および、7月13日の3回にわたって話を伺った。その

後、「新しい人権」と沖縄」をやることが決まったあと、9月1日から2日にかけて、この話のとき伺った三重県亀山市に実際に行き、日系ブラジル人労働者の様子を観察させてもらった。

1、5月17、18日の記録

17日の夜、伊芸弘子さんと妻と3人でマウロ先生のところに行った。マウロ先生は、今は三重県の亀山というところで翻訳事務所を開いていて、沖縄には1～2か月に1回、1週間ほど帰ってくるそうである。名古屋空港から車で1時間ほどだそう。亀山の隣が鈴鹿で、ここにホンダの工場があり、マウロ先生は、亀山にあるホンダの下請け工場で働く日系ブラジル人たちの世話をしている。現在、150人くらいの日系人が働いていて、業種は単純作業である。

マウロ先生を頼って、ブラジルなどから出稼ぎの人が来るのが頻繁になったのは5年ほど前からである。最初は、これらの人々は沖縄で働いていたのである。ところが、職が少ないし、賃金も良くない。わざわざ日本にやって来ているのだからまとまった金がたまるようではなければならない。ということで、本土の企業で働くようになったのだが、最初は、いわゆる人材派遣方式によるものだった。しかし、これだと企業は単に必要な労働力を補うということしか考えない。それで現在は、1年間の契約社員という形で企業が直接雇うのだそうである。1年ではあるが、安定しているし、亀山という町が4万人ぐらいのようで、小さく、そして、町全体が日系労働者受け入れに協力的なのだそうである。そういうことで、今は落ち着いてうまくいっている、と。そして、段々日本滞在も長くなって来る傾向があるそうで、そうすると技術をおぼえる者も出てくる。もっとも、マウロ先生が関係しているところのようにうまくいっているのはむしろ例外であり、今後このようにうまく行くところが増えるのかどうか、特に景気が悪くなりつつあるので分からないということだった。

2世までは、日本のことをよく知っているし、日本文化に興味をもっているものが多いが、3世になると「ただのブラジル人」に近くなる。家族のためというより、自分たちのために来たという感じになる。ブラジルへの送金も、2世だとちゃんと送っているのが、3世だと、そうではなくなっていく。彼らのブラジルにおける社会階層は様々で、弁護士などもきているのだという。それでも、こちらの方がもうかる。ブラジルでは現在、最低賃金が月6000円ぐらい、事務職でこの4倍の2万4000円程度だから、どの程度賃金の差があるか分かるだろう。

マウロ先生は日系のブラジル人が日本にきて働くことには賛成だという。それは、ブラジルでは考えられなかったような生活をするうち、「向上心」が起ころうから、と。まあ、自分の国だけ知っているよりはいいに違いない。

しかし、私が昨年ブラジルにいったとき聞いた話でも、出稼ぎには批判的な意見のほうが強いように思われた。というのは、なにしろ、失業者ばかりが行くというのではなく、むしろ逆に、現地を支

えてきた層が抜けていくのである。そして、帰っても、出ていく前の仕事が保障されているわけではなく、そうなると、また日本にきて働くということになりやすい。結局、ブラジルに技術など還元されないというのである。

日系人としての誇りはどうなるのだろうか。2世までは「日本人」としてのアイデンティティを持っているけど、3世になると、「ただのブラジル人」だそうだ。この点は、1世の教育が、どうもまざったようにも私には思われる。無理もないとは思いますが、何というか、箱入り娘的に育て、それに育てられた3世がよくも悪くもブラジル化すると。ところが、貧しかったはずの祖国は経済大国になり、ブラジルの方はいつまでたっても先が見えない状態である。

「ただのブラジル人」で悪いというわけではないが、といてマウロ先生が挙げる、日本のいい点の第1が教育である。次に、健康保険制度である。教育がいい、というのは最低限、義務教育はちゃんとやってもらえる、といったことである。健康保険制度については、ブラジルでは乳幼児の死亡率が高く、平均寿命も短いことから、有って当たり前と思っている我々には想像できないくらい大変有難いものなのである。そうするとこれはいずれも最低線の問題だということが分かる。

マウロ先生自身は、その線を越えて、「日本のほうがいい」論者になっている。それは、家族の団結協力がある、ということなのである。これはずっと以前からのマウロ先生の持論であり、私がポルトガル語を教わった1984年にも、「スイミー」が理想だということをきかされた。でもこの当時は、マウロ先生は、生活はブラジルのほうが良いとはっきり言っていたのである。庭はブラジルの植物でいっぱいだった。

ところで、「スイミー」を書いたレオ・レオニはイタリア人なのである。そして、マウロ先生のお母さんはイタリア系移民である。おじいさんの奥さんがポルトガル人である。そこから生れたマウロ先生のお父さんは、「100%ブラジル人」とマウロ先生は言う。このように言うときの「ブラジル人」とは「自分のことしか考えない人」のことである。だから、マウロ先生の家はお母さんを中心にして団結してきたのである。実際、1985年にサンパウロのマウロ先生の実家を訪ねたとき、このことを実感した。お父さんは全く無視されている。マウロ先生が15歳の頃、一家は沖縄に来たが、やがて引き上げ、トートーメーを守るということでマウロ先生だけが沖縄に残った。ひどく貧乏で、借金が山ほど有るようだった。しかし、それにもかかわらず、なかなか派手で、バーベキューパーティーをよくやっていた。この頃のマウロ先生は、能力があるのに買ってくれないということで、狭い日本社会、沖縄社会の批判をよくやっていた。私も日本が好きではなかったの、話がよく合った。「こんな狭い沖縄で成功したからといって、それでどうだというのだ」と。

その後、ブラジルなどから働きに来た人々を世話するうちマウロ先生は急に忙しくなり、私とは比較的疎遠になった。最近はずっとそう、本土で仕事をしているのも知らなかった。

今回会ってみると、マウロ先生は以前より一層太っていて、顔は赤らみ、すぐに小錦を連想させたが、小錦の、例の、人種差別で横綱になれないと言った、言わないの問題については、「この件についてはよく知らないけど、外人は小さなことでも大袈裟に言うことが多い」そうである。今ブラジルからくる人々が日本に来て、日本流の家族主義者になることがそうそうあるとは思えない。

いいとか悪いとかを越えて、日系ブラジル人はどんどん入り込んでくる。マウロ先生は、それを橋渡しするのにうってつけの場所にいたわけである。そういうことでこのような仕事について、先生自身のアイデンティティが一番揺れたのではなかったか。何しろ、ポルトガル語は、1984年に私が教わっていたときは、何ら実用性をもつ見込みもない言語だった。生徒も私1人だった。それが、飯の種になるとは、誰も予想できなかったのではないか。

さて、翌18日の夜も、昨日と同じ3人でマウロ先生を訪ねた。お客さんがあって、サンパウロ州のサントアンドレとかいうところから来た夫婦とその3男の息子、つまり孫である。妻たちが、マウロ先生から、生い立ちや民話を聞く間、私はこのおじさんの話を聞いていた。もとはペルーにいて、それからブラジルに移ったということだが、そして、子供が埼玉に出稼ぎに来ているのを訪ねてきたということだが、多くのブラジル人が言うように、窮屈に感じるそうだ、日本は。「商売にしても、ブラジルだと、物をおいとけばいいし、早く売れなくても値上がりしていくからいい。日本だと、ありがたいございましたといわないといけないし、たいへんだ。沖縄は、内地よりのんびりしているけど、親戚づきあいが多くてたいへんだ。沖縄なら住めるかと思って来るけど、やっぱりブラジルの方がいいと皆言う」これが普通の反応である。マウロ先生は、少なくとも3年は住まない日本の良さは分からないという。そして、これからそういう人がまとまって出てくる可能性もある。

2、7月13日の記録

7月13日、「平和学習講座」のレジュメを作るため、マウロ先生の家に行った。車を修理に出しているので、夕食後自転車で行った。84年に毎日のようにこうして自転車で豊見城まで通ったことを思い出して懐かしかった。マウロ先生の家に着いたとき、ちょうど、マウロ先生の奥さんや子供を乗せて、マウロ先生の運転する車が帰ってきた。奥さんを英語学校に迎えにいったのだそうである。「サンビセンテ外語学院」という看板ははずしておいてあって、今はもうやっていないのだそうである。もと、私が授業を受けた棟は、親戚のおばさんにただで貸しているのだそうである。

12日に沖縄に戻ってきたそうだ。13日は日中草取りをしたそうである。眠そうだ。私も、13日の昼過ぎに広島から帰ってきたばかりで眠い。

講演については、何話したらいいんですかね、とって、私の質問に答えていけばいいんだろうみたいに言うので、最初、この前5月17、18日にマウロ先生から聞いた話を私がまとめたものを読

んだ。私が音読するのを笑って聞いていた。

人材派遣と、契約社員の違いということから話が始まった。マウロ先生の働いているのは(株)Fテックという会社だが、もう20何年かになる会社で古く、かつ、以前から季節労働を使っていた。季節は人の入れ替えがあり大変なのと、時給が、季節1800円に対して、日系ブラジル人の場合1400円で安いということで、会社がこちらのほうを選好した結果、現在、季節10人に対し、日系ブラジル人110名になっているのだそうである。そして、ブラジル人でも、例えばサンパウロから来た中流社会出身者だと、いわゆる3K労働はやらないし、文句ばかり多くて使い物にならないという。ジブシーのように転々とする日系人も多いらしい。それで、Fテックで働いている人達は、ブラジルの田舎出身の人が多いのだそうである。日本への渡航費用は片道約30万円だそうであるが、これを会社が立て替え払いし、6か月で給料から差し引いて償却するのだそうである。

今の移民は恵まれているとマウロ先生は繰り返す。日本人よりむしろたくさんもらっている。土・日が休みなので、あちこち旅行しているそうだ。昔、日本からブラジルに移民したときはこんなもんじゃなかった、と。

不況の影響は少なくとも今のところ出ていない、というか、それで首になったということはないそうだ。もともとFテックというのはホンダの下請けだったようだが、今はそれに限らず他の、日産などとも取引があり(部品販売)、不況の影響がもたらさないようである。それに、定着がいい結果、技術を身につけていくので、実質的には技術工になっていくので、そうなると会社としてももっと長く働いてもらいたいということになるのだろう。ヴィザは日系ブラジル人の場合、定住ヴィザだから問題ない。マウロ先生が今の仕事を頼まれたときも、家族持ちはできるだけ家族と一緒に来ることができるようという方針でやったという。最初は奥さんを連れて来た人は5名程度だったのが、その後呼び寄せる人は増えて、今は奥さんが20名ぐらい、子供たちが30名ぐらい来ているのだそうである。では、今いる人達はこれからもずっと働くつもりなのだろうか。客観的条件から考えるとそうなるしかないのに、そのつもりにならない人が多いようである。1年半もいて、賃金の半分ぐらいは本国送金し、実際すでに家を建てた人もいるそうである。しかし帰っても今のような仕事があるわけではないし、こちらの生活水準になじんでしまえば、もとは戻れないだろう。それなのに、今は国際電話も安く、1か月に何と10万円も電話する人もいる。1年目は万事新しいからそれほど恋しいということもなかったのが、2年目になると故郷が懐かしく、恋しくなるらしい。3年経てば日本に定着するだろうというのがマウロ先生の意見だが、そうだろうか。ブラジルで、気持ちの落ち着くのに10年かかったという話をよく聞いたが、マウロ先生によれば、今は電話も安いし、飛行機代も安いので、昔とは条件が違うという。そうかな。逆ではないのかな。

とにかく、ブラジルの日系人に日本の文化を教えるというのはいいことだとマウロ先生が強調する

ので、ドイツでは「同化」ではなく「統合」ということを目指しているという話をしてみたら、こんなことがあったという。国際センターで外国人を呼んでパーティがあり、マウロ先生も自腹で食べ物を用意していたら、イスラムの人が、豚肉は食えないから、そうじゃないのをくれと要求したというのだ。頭を下げて頼むならともかく、当然のように要求されて不愉快だった、と。もしマウロ先生があちらに行って、自分はまぐろしか食えないからとかいったらどうなるのだと。だいたい、人間何でも食べるべきだというのである。これは食えない、あれは食えない、といわれたのでは招いたほうも不愉快だ、と。

ともかく、日本式教育というのをやってやるのはいいとマウロ先生がいうので、いや、日本の現状はめちゃくちゃだ、といって、そもそも会社に、はいはい言うだけの人間しか育てなかったから経済的に成功したのは当たり前で、そのかわり皆、言いたいことも言えない、そういう状態の中で神経を病んでいる、小金はたまるようになったかもしれないがその使い方も分からない、世界中でばかにされてるじゃないかという、マウロ先生は、いや日本の教育の問題点はよく分かっているけど、ブラジルの事情を考えるとまた別なのだと。ブラジルは、周知のように混血が進んでいて、ムラト（黒×白）、カボクロ（白×インディオ）、マメルコ（黒×インディオ）と色々いるが、そして今、日系の家庭でも混血が始まっているが、ブラジルの広大な土地を所有しているのは1割ばかりの白人というかヨーロッパ人である、と。混血はいつまでたってもだめで、それは教育がないから、というにつきると言うのである。日本の企業でも5Sがないとか言われているそうで、それは、整理・整頓・清掃・清潔・しつけだそうである。なるほど、そうすると、特に「日本式」がいいというのではないのかと思うと、そうでもないみたいである。日本にはいいものがたくさんあるというのだが、きいてみるとそれは現在の長所というよりかつての日本の長所のように思われるのである。つまり、いい時代の日本の家族主義みたいなものではないか。というより、これは沖縄の考えなのか。トートーメーを守るということで、マウロ先生が、家族の中で1人、沖縄にとどまったことがいまさらのように思い出される。マウロ先生は何か強烈な原体験をもっているのかもしれない。あるいはまた、逆に、反面教師的家庭であったがゆえに形成された夢なのかもしれない。

実際、今迷っているのだそうだ。家族と離れた生活は嫌だ、と。会社との約束はほぼ果したので、色々考えているが、でもこれからどういう仕事をしたらいいか、まだ考えがまとまらないといった状態のようである。

3、9月1、2日の記録

1日の午前8時26分発の関西本線普通列車で名古屋駅を出て、9時40分に亀山に着いた。終点である。リュックをコインロッカーに入れてから駅前の店で市役所の場所を聞いた。歩いて5分ぐら

いということだった。マウロ先生からは2日にしてくれないかと言われていたので、今日会えなくても仕方がないと思い、しかしせっかく来たので、亀山市の外国人労働者対策でもきこうかと、まずは市役所に行ってみることにしたのである。

亀山は城下町で、城址のそばを通過して坂道を上がるとすぐ市役所に出た。小学校の前である。余りに簡単に出了たので、もうちょっと町の様子を見てからが良かろうと、さらにちょっと歩くと、中心街らしい通りに出た。といっても、城下町の例にもれず、一般に道は狭い。本屋が見えたので地図を捜すと、鈴鹿・亀山のものがあつた。それを買うとき、Fテックの場所をきいてみたら、奥にいた主人らしい人が出て来て教えてくれた。歩いていけるようだ。本屋のすぐそばの喫茶店で、モーニングを食べながら亀山の地図を見た。地図には工場名なども出ているのに、Fテックという会社は見当らない(あとできいたら、もとは福田プレス工業といっていたのを社名変更したのだそうで、旧社名なら誰でも知っているということだった)。それでもまあ、行ってみるかという気になって、教えられたほうへ歩き始めた。30分近くも歩いただろうか、栄町というところに出て、案内図でFテックの場所が分かつた。この案内図に、栄町公民館も載っていたので、まずそこへ行つたが、閉まっていた。サークルの予定表を見ると、外国人を思わせるものは何もない。そもそも、ここまで歩いて外国人らしい人に全然出会わなかつた。ちょっと変だなと思う。

それからFテックに行つた。工場の入り口のところに管理事務所のようなものがあり、男の人が1人いたのでマウロ先生の家をきいた。その人は、今行ってもいいないよ、といい、私が沖縄から来たこと等を言うと、事務所で待つようにと勧められた。で、椅子に座って机を見るとマウロ先生の名刺が置いてあるので、ここがマウロ先生の事務所だということが分かつた。きけば、これまで事務所は別のところにあつたのが、派遣会社が撤退し、そこが使っていた事務所がここだそうで、引っ越してきたばかりだそうである。男の人はブラジルの2世で、河谷ジュリオさんである。両親はいずれもヤマトンチュ。最初はワープロを打って忙しそうにしている、かつ冷たい人のように思われたのだが、私がブラジルに行ったことがあることなど分かつると、興味を持ったのか、話し相手になってくれた。マウロ先生は今市役所などに行つていて、それはブラジル人を小学校にいれる手続きのためのようである。やがて、若い男の人が入つてきて、この人は私と沖縄のマウロ先生の家で5年ぐらい前会つたという。大城さん。日本に来て7年であるが、ここに来たのは最近だということだった。

雑談しているうち、マウロ先生が戻つて来た。今日はうちに泊まって下さいとマウロ先生がいう。やがて、別の会社の人がボリビア人の出生証明書の翻訳を受け取りにきた。1人3000円で、4名分ぐらい。

マウロ先生に誘われて、2人で車で出て、まず旧事務所に行く。警察の表彰状がある。この事務所もこれまで通り使うそうだ。それから、国道1号線に出て、かなり走つて関町の関西ゴムという会社

に行く。ブラジル人がたくさん働いていて（後できいたら16～7名）、若い人が多いが、46歳とかの人もある。ここの若い人の何名かが会社内の寮を出てアパートに引っ越すのだそうで、その荷物を運びにきたのである。ボストンバッグなど積んでから、われわれのほかに1人一緒に乗り出発。Fテックそばのアパートに荷物を運び込む。帰りに、一緒に乗ってきた人のためまず銀行に寄り、それから三文判を買って郵便局に行く。定額預金口座を作り、時計など入った小包と手紙を送る。対応した若い女性の局員はずい随分おかしがっていた。色々トンチンカンなことをやるから。終わってのあいさつもチャオ。

この人を関西ゴムまではこび、荷物をまた若干積んでから、2人で近くのドライブインに行く。今夜名古屋空港にブラジル人を迎えに行くからたくさん食べておくようにといわれる。今マウロ先生はFテック以外のところとも関係を作ろうとしていて、関西ゴムもその1つである。ここはまだブラジルからやって来たばかりの人。さっきのボリビア人の件も、Fテックとは全然関係ないようだ。仕事の拡張に伴い、大城さんやジュリオさんを使っているらしい。Fテックはホンダのペダルや踏み台を下請しているが、それも孫請会社の製造するものを仕上げる仕事だそうで、こういうのがホンダだけで260もあるのだという。そのほかにも工場はたくさんあり、だから、仕事はどんどん拡張できるとマウロ先生は考えているようだ。警察に協力していて、ボランティア登録して、問題が発生すると通訳する。裁判所にも行くそうだ。ブラジル人は自分勝手に、どこまで世話しても文句を言うそうで、さっきの引っ越しも、朝9時の約束が午後になって、皆さん不満をブーブー言っていたそうだ。でも、不満を言いながら楽しむのが彼らの流儀で、うまくやっていると。

5時前まで話してから、関西ゴムに行き、更に荷物を積んで、2人の青年をのせ、途中、別のアパートでおばさんを1人のせ、さっきのアパートで荷物と青年を降ろす。何でも、午後8時に着く予定が3時にもう着いているのだそうで、そして、今日このおばさんの子供も来たので一緒に出迎えに行くのだそうである。事務所に寄って、大城さん、ジュリオさんと打ち合わせてから最初に出発する。おばさんが早く早く、という感じで、高速道路を飛ばす。空港で、おばさんは、子供3人と夫に1年4か月ぶり会った。後から大城さん、ジュリオさんの車も到着し、分乗して行く。マウロ先生の車には、私とおばさん夫婦が乗った。途中、デニーズで食事してから行く。ブラジル国内もろくに旅行したことのない人なので、緊張して機内で食事也十分できなかったらしい。ブラジルでは、子供が国外に出るには両親の許可が必要で、ところがお母さんはこうして先に日本に来てしまっているのだから許可が出なくて、やっと許可が出たと思ったら、指定されている飛行機が予定していたマイアミ、ニューヨーク経由でなくロス経由の便で、そのため早く着いてしまったということだ。

おばさんのアパートは2階建2棟のうちに1つだが、ここはすべてブラジル人だそうだ。各1部屋で狭いが、バス・トイレ・キッチン等必要なものはそろっている。1人1万円、2人で住んでいる場合

が多いようである。おばさんも、先に来ていた息子と住んでいる。この息子は17歳で、もう働いて、20何万稼いでいるのである。まだ来てそんなにならないようだ。他に、おばさんの妹などが既に来ている。こうして順に呼び寄せているのである。まだ一番上の子と、両親が残っているようだ。今回夫も来たので、既に別の大きなところに引っ越すことが決まっている。おばさんは車も持っているので引っ越しは簡単にできる。やって来て、どうしても合わないというか、ホームシックにかかってノイローゼ状態になって帰国せざるをえなくなるということも、マウロ先生のところでも2件あったということだ。このアパートではブラジル人たちは仲良く助け合っているようである。

11時頃ここを出て、また関西ゴムに行った。夜勤の人を迎えに行くと約束したようだ。夜勤が終わるまで、4人の日系ブラジル人を相手に、まず形だけ日本語の勉強をし、それから雑談。日本に来たばかりなので、色々レクチャーして、普通の日本人は生活は大変なんだよということとか、あいさつの仕方とか教えている。様子を見てみると、それぞれに不安で、寂しいのだろう、マウロ先生を離さない。2時前に夜勤が終わったようだ。必ずしもマウロ先生に好意を持っている人ばかりではない感じだ。3人のせて出発し、引っ越したアパートに連れて行く。これでやっと仕事が終わったのである。

マウロ先生のアパートはFテックの近くであるが、私は、大城さんとジュリオさんが寝ているところに案内された。すぐに寝て、朝6時半に目が覚める。お手伝いの女性がメリケン粉を揚げていた。やがてマウロ先生もやってきて、コーヒーのんでから、この女性も一緒に出発。この人も関西ゴムで働いているようで、日本に来て半年余りのようである。クリチーバ出身だそうだ。昨日引っ越したところで、3人拾う。8時10分前までには工場に着かないといけないというが、皆さん眠いようである。昨日2時まで夜勤していた人もいるのである。ここに来て、過労で次々にダウンして時間を短くしてもらったということだが、実際大変だろう。

途中亀山駅で降ろしてもらい、私は京都に向かった。

II スペインの旅

たんに「新しい人権」について述べるのではなく、沖縄との関連で述べたいということで、比較に適切な場所を色々考えた。コスタリカとベラウが最初の候補だったのだが、都合がつかないうちに9月も中旬になって、急きょスペインのバスクに行こうと決めた。前から行きたいと思っていただけでなく、色々な意味で面白い比較ができるだろうと考えたのである。

9月11日、コスタリカ行きを断念、12日、バスクに行こうと決めた。妻の理解を得るために、狩野美智子「バスク物語」（彩流社・1992）を渡したら、翌日までには読み終えて、興味を感じたようである。13日、東京の旅行社と連絡を取り、14日に上京することにした。13日夜、沖縄に来ていた東京学芸大学の小林文人氏を囲んで飲み会をした。そのときバスクに行く予定を述べた。14日は月曜日だったが、すでに勤めに出かけた妻から、彼女の切符も買えたら買っておいでとくれとの書きおきがあった。「バスク物語」の効果があり過ぎて、自分も行く気になったらしい。彼女はこのところ鶴見俊輔氏のものを読んでいたので、それが影響したのかもしれない。鶴見氏のものは人を旅させる不思議な力を持っている。今年の夏はもう動けないと半ば観念していたのに、成り行きというのは恐ろしい。14日、東京に出てから16日発の成田—マドリード往復切符を買った。以前はアンカレッジ経由の北極回りが全盛だったが、今は、シベリアの上をまっすぐ飛んで行くようになったのである。所要時間は大幅に短くなっている。15日は、私は買い物をした。持っていく本に、野々山真輝帆「スペイン辛口案内」（晶文社・1992）を加えた。その他に、地図と、スペインとフランスの鉄道時刻表等も準備した。この日、妻が沖縄から来た。そして、予定通り、16日12時発の日本航空便で出発した。

日本航空で成田を発ったのは初めてである。これが、直行便では一番安かったのである。機内で尾形拳主演の「おろしや国酔夢譚」をみた。スチュワーデスのサービスも素晴らしく、日本航空のイメージが変わった。ただ、機内で出る寿司は、あいかわらず手をつける気にならない。アムステルダムを経て、同日午後8時40分頃マドリードに着いた。日本時間より7時間おくれである。アムステルダムでの休憩も入れて所要15時間40分ということになる。

空港ではパスポートにスタンプも押さない。空港バスと地下鉄を使って中心のソルにて、そのそばの安宿に決めた。着いてすぐ外に出ようとする、宿の主人から注意するように言われたところからすると、治安はよくないらしい。そばにマクドナルドができたので、そこに行った。メニューにはビールもあるし、カフェ・コン・レッチェもある。若い人達のたまり場になっているようである。警官なのかガードマンなのか、とにかく見張りがいる。水は生水が飲める。

翌17日は、「ゲルニカ」を見に行った。ブラド美術館の別館にあるということで、歩いて行ったのだが、ない。現在は、ソフィア美術館に移っている、と。で、そこまでまた歩いて、乾燥して暑いのに加えて、時差ボケもあってくたびれた。ソフィア美術館というのはアトーチャ駅のそばだが、現

代の画家のものを中心とした素晴らしい美術館だった。堪能した。その中でもやっぱり「ゲルニカ」が一番人気があって、多くの人がその前に群らがっていた。こんなに大きな絵だとは思わなかった。この美術館でも一番大きい方ではないかと思う。

「ゲルニカ」だけでずいぶん時間を食ったが、その後、バスクのビルバオに行くバス会社探しにも時間を食った。多くのバス会社が集まっている南部バスターミナルにはビルバオ行きのバス会社は入っていないのである。インフォメーションで会社の住所を教えてもらい、詳しい地図を買って場所を調べて行くと、確かにあって、そこで翌朝の切符を買った。利用して気がついたのは、皆さんまずインフォメーションに行って、時刻表等をもらってから切符売り場に並ぶことである。私はいきなり切符売り場に並んで、そこできいたが、それでも結構親切だった。

それから、ソルのそばで昼食にしたが、実はこれまで、貧乏旅行ばかりやってきて、ヨーロッパではちゃんとしたレストランに入ることなどなかったのである。定食というのが3段階ぐらいになっていて、各段階に何種類か料理があってそれを選ぶのである。最初、そのことがわからず苦労した。分かってみれば簡単だが、それにしてもいいもん食ってるんだなあ、と思う。昼食が主食だからというのは分かるが、ずいぶん凝っている。値段も、東京から行けば安く感じるかもしれないが、沖縄から行くと結構高い。1000円前後だと思う。実はこの点は、我々の滞在中EC関連の通貨不安があって、通貨切り下げがあった。それでかなり楽になった。昼寝をしてから、夕方は、マヨ広場周辺を散歩した。

3

18日、朝8時半のバスでビルバオに向かった。バスは大変上等で、かつ、道も大部分高速道路で申し分なかった。いずれも予想外だった。5時間ほどでビルバオの町に着いた。ビルバオの家々が見え始めてからずいぶん大きな町であることにびっくりした。着いた時、ちょうどシエスタ（昼寝の時間）中で、インフォメーションなどもお休みで、地図も売ってない。客待ちのタクシーに、「バスク物語」に出ているオスタル・イバラという宿の名をいって見たが、知らないという。荷物を持って町を歩いていくことにした。噴水のあるロータリーを過ぎて、やがて駅の見える橋に出た。宿はいくつかあるにはあるが、ちょっと入るのをはばかる感じである。橋の向こう側は一層汚い感じ。危険を感じるというのではないが、どうも落ち着かない。とにかく駅にいてみることにした。段々、落ち着いた感じになってきた。ノルテ駅に出た。ここが、町の中心部のように思われる。スペインの他の町のような装飾的な感じがある。駅前の周辺を歩いてみて、適当な宿があったのでこの日はここに決める。荷物を置いてすぐまた出て歩いた。とにかく、腹が減ったので、レストランで昼食にする。隣の

席に若い女の人が出て、英語をしゃべるので、妻は早速この人と話し始めた。レオンから来て、これからこの大学に入学するのだそうである。食後、レストランの近くの文房具屋に入る。地図があった。ビルバオのとバスク全体のとをかう。その他に、絵はがきなどもあったので買ったが、絵はがきなどかう人はめったにいない感じ。地図を見てやっと、我々がどのへんにいるのか見当がついてきた。ノルテ駅前に大きな橋がかかっており、これが新市街と旧市街との境目になっているようだ。オスタル・イバラは旧市街のはずれにあるとかがれているので、橋を渡ってみた。あった。オスタル・イバラの看板を見つけた。中に入って、階段を上り、イバラのドアの前で呼び鈴を鳴らした。「バスク物語」に載っている写真のおばさんが出てきた。マイテさん。けげんな顔をしている彼女に、日本から来たと言い、本を取り出すと分かったようだ。今日はすでに宿を取ってしまったので、明日ということになる。明日は我々は、朝からゲルニカに行く予定である旨告げると、では荷物は今もって来ておけば預かっておくからといってくれる。宿に戻って、明日使わないものをリュックにまとめ、イバラに持っていく。イバラが見つかって、この町が急に親しく感じられ始めた。

まず、ゲルニカに行くバスの乗り場を人にきく。ノルテ駅の隣である。ノルテ駅では、時刻表を見ていたら、バルセロナ行きの直行の夜行列車があることが分かったので、妻と相談して明後日の寝台券を買った。それから、新市街のほうへ歩いていってみた。デパートがあるので入ってみた。妻が言うには、みんな物に取りつかれてる感じ、と。実際、私もそう感じる。物欲というのが我々とは全然あり方が違うのではないかとさえ思う。これは、ヨーロッパどこでも感じてきたことだ。暗くなるまでさらに歩いて、最初の噴水のあるロータリーに出た。暗くなってきて、店はたいてい閉まってしまうが、こうして歩いてみて、町の中心部の構造はほぼつかめた。最初にバスで着いたところは新市街のはずれ。そこから、噴水を越えてから渡った橋の向こう側が旧市街のはずれ、こういうわけである。宿に帰ってシャワーを浴びたところで、寝台の日付が今日になっていることに気づいて、訂正してもらいに行く。夕食は、サンドイッチを作ってすませる。昼が一杯なので、夜また店で食べるほどお腹は空かない。

4

翌19日、6時に宿を出る。7時15分のバスに乗るつもりでいったら、よく見ると土曜日は運休である。9時のバスしかない。ゲルニカには列車でもいけるそうなので、ノルテ駅できいてみると、ゲルニカには別の駅から出るというのである。そうしたら、そこへなぜか青年がやって来て、どうもアルコールをお召しのようなのだが、一緒に連れててあげると。ついていく。川の旧市街側をずっと行くのである。魚市場等が集まっている感じ。いちいち説明してくれる。やがて着いたという、そこ

はまだシャッターがおりていた。半信半疑で中をのぞくと確かに駅のように、そして人が来たのできくと、始発は8時50分、と。案内してくれた青年は行ってしまったが、途中話したところでは、音楽が彼の仕事なのだそうで、終わって帰るところなのだそうである。とても気持ちのよい人だった。バスのほうがよからうということになって、もとのノルテ駅に戻った。駅で朝食をすましてから9時のバスに乗った。

ゲルニカまではそんなに時間はかからなかった。せいぜい30分程度。高速道路を使うので速い。ゲルニカに着くと、そこにLekeitio 行きバスが待っていて、これがサンティマミーニエに行くといので、乗り換える。ちょっと乗ると、ここだと降ろされたが、降りたのは我々だけだった。てっきり他の多くの人も降りるのだと思ったのに。バスの皆さんに見送られて、遺跡への道を歩き始める。バスを降りたところから、地図では3キロ足らずなのだが、ずっと登り坂で、長く苦しかった。おまけに時々バラつく天気。バスクというのは雨の多いところなのである。着いたのは10時半だった。

ここにアルタミラの遺跡と同じようなクロマニヨン人の遺跡がある。「バスク物語」を読んで、なぜかここだけは是非行こうということになった。で、いつでも見学できるのではない。時間が決められていて、無料だがガイドがつくのである。その時間以外は、鍵がかかっているのである。それが、今日は11時からグループということで、入り口前に行ってみると何人か確かにいたが、時間になっても開かず、結局12時半からとなった。ここで待ちながら、帰りのことが心配だった。歩いて帰るといっても大変である。行きはよいよい、だ。若いカップルと親子連れだが、いずれも自家用車。乗せてもらえるだろうか。考えて、直接頼むのはやめにした。こっちにも自尊心というものがある。それより楽しくやって友達にでもなったほうがいい。幸い、本や地図を色々持っていたので、まず地図を出した。この地図、昨日買ったものだが、絵が入っていて楽しい。モンドラゴンの位置をきくところから始めた。ここは世界的に有名な協同組合の発祥地である。山あいの小さな町である。話が段々広がってきて、特に若いカップルとは話が合う。釣りの帰りにここに寄ったそうである。住んでいるのはビルバオだそうだ。「バスク物語」の写真には皆がのぞき込んだ。いい空気になったところで開門。壁画はほんのわずかしかない。しかしその後、延々と洞窟の中を歩き回る。広くて、階段が多くて、2時前に出たらボーッととなった。皆同じような顔をしている。そこへ、カップルが、一緒に帰ろうと誘ってくれた。作戦通りなのだが、こんなにうまく行くとはい意外で、かつ嬉しかった。車はブジョーのバンタイプ。途中ゲルニカで降りる元気もなくなり、ここが「ゲルニカの木」と教えてくれたのも、車から眺めるだけで通り過ぎる。これだけ道が整備されると、街道の町であるゲルニカなど相当影響を受けるだろう。車の中で、バスクのことをきいた。彼らも、バスク語は、きけるけど話せないのだそうだ。バスク語の番組にラジオを合わせてくれる。ベルチョラリという即興詩について妻が

質問する。3時にはビルバオに戻っていた。ここは個人主義の徹底したところだそうで、よっぽでなければ乗せてはもらえないだろうと思っていたのに、実に幸運だった。

イバラの隣にアマヤというレストランがあり、ここでまず食事した。それからイバラに行く。広い部屋のツイン。満足。ちょっと休んで外に出ようとしたら、マイテさんが日本人を連れて現れる。何と、「バスク物語」の著者である狩野美智子さんだった。3日ほどギブスコアに行つて、帰つてきたところだそうである。持っていた本に署名してもらった。

夕方は、旧市街（カスコ・ヴィエホ）を歩いた。といっても、丘になっていて石段を上って行く。土曜日のせいか、大変な人出である。昨日ついでから最初に見た場所とは、空気も違い、人々はゆったりとして余裕がある。経済状態も悪くないようで、マドリードより服装もちゃんとしている。下を見下ろしながら上って行く。途中、老人会のようなところにも出た。年寄りが多いようである。上り切ると広場になっている。煙突がたっている。建物は鉄筋だが、色は茶色で統一され、皆屋根がついている。

夕食をすませてイバラに戻ると、狩野さんが部屋を訪ねてきてくれた。ここでこのように話せるなんて夢みたいだ。いずれ東京ででもお会いしたいと思っていたのである。穏やかではないですか、というと、今でも結構過激なんだそうである。民族独立運動は。我々が明日までなので、その前に行つたほうがいいという美術館と博物館の場所を教えてくれた。狩野さんは「沖縄を学ぶ」（吾妻書房・1991）という本の著者でもある。最近増補版がでたという。最初の手稿は沖縄大学の新崎盛暉氏に見てもらったそうである。本の内容は、ときと、歴史だそうで、それも最初から現代までというのでたまげた。

5

翌20日、ノルテ駅のホームにある食堂で朝食を食べた。サンタンデルから来た夫婦がいて、英語を話した。妻はスペイン語は全然だめなので、英語が分かる人には誰にでも話しかける。それから新市街を歩いて、まずビルバオ美術館にいった。量は膨大だったが、パッとした印象は得られなかった。それから、歩いて、大きな橋を渡ってから旧市街側に入り、旧市街のおそらく中心部にある博物館に行った。途中、ペロタ（ハイアライ）競技場の前を通つたのでちょっと見たが、誰でも入れる。博物館は、テーマは、バスクの家（カセリオ）、船、地勢等である。とにかく、最後の日なので、間に合うようにと急いだ。博物館の後、川岸でやっていた蚤の市を妻は見に行つた。私は橋のたもとに座って待った。妻の話では、この市は安いものばかりで、お客さんも貧しい人達のようなのである。バスクは全体としてはスペインの中では豊かなほうに入るが、階級差は残っていると思う。民族独立運動

が多岐に分裂するのもこのあたりにも原因があるのではないか。その後、また旧市街をうろついた。飽き飽きするほど歩き回ったが、こういうところに何度も来る、例えば狩野さんの気持ちというのは今一つよく分からない。人々は散歩が好きなようである。何が楽しいのだから。妻は昨日と同じ様に、「物ばかり見ている」といって、ここの人に批判的である。この日も食事はアマヤにした。

夜の9時15分発の夜行でビルバオを発ち、バルセロナに向かった。

6

今回の旅でぜひ行きたいと思っていたもう1つの場所はアンドラだった。バルセロナはその中継点として利用したものである。アンドラに興味を持つようになったのは、梅棹忠夫氏や鶴見氏の書かれたものを読んでからだ。特に、鶴見氏の「小国群像—アンドラ、サン・マリノ、ヴァチカン—」という文章（「鶴見俊輔集 11 外からのまなざし」（筑摩書房・1991）所収）は興味深かった。今書いている途中、たまたまアンドラのことを新聞に載っているのを見つけた（朝日新聞（東京版）92・12・7夕刊）。それによれば、スペインとフランスの国境にあって、面積468平方キロメートル、標高1000メートルの溪谷に広がり、人口は約5万人である。自由貿易を看板にスーパーや免税店が軒を並べ、年間1000万人の買い物客・観光客が集まるというのである。鶴見氏が上記の文章を最初に発表された1982～3年頃の段階で人口2万5000人だったそうだから、この10年で倍増したわけである。鶴見氏の文章からは老子が説くような小国寡民のイメージが浮かぶが、それと、買い物ツアーとがどうしてもイメージとしてうまく重ならない。それを現場で見たかった。21日の朝8時40分にバルセロナに着いた。コインロッカーに荷物の大部分を入れ、インフォメーションでアンドラ行きバスの会社の場所をきく。大学のそばである。地下鉄で行って、午後2時45分の切符を買った。地下鉄に乗ったとき妻が気づいたのは、次の駅はとマイクで案内するとき、男がたずね女が答えるのである。味なものだ。ただ、乗り換えのホームが離れすぎていて、使いにくいのが難だ。出発までにランブラス通りという、バルセロナの銀座に行った。ここは18年前に歩いたのだが、変わらない。相変わらずにぎやかに、陽気にやっている。都会らしく、昼食なども手頃なものがある。やっぱりスペインでは一番開けている感じがする。

バスに乗って、途中地図を見ていたが、該当する地名がない。カタロニア式の地名は違うのだろうか。とにかくどんどん山を登って行って、Pont de l'Urgellを経て午後7時前にアンドラに入ったのである。スペイン・アンドラ間にボーダーはあるが、客はバスに乗ったまま何もしないでいい。のどかな山の景色の中にやがて高いビル群が見え始める。車も渋滞し出す。大型のバスやトラック、それに自家用車。なるほど、現実だったんだな。終点で降りると、寒い。ここに着くまでの様子を見て、私は

1泊で十分だと思った。店は8時までだろうから、とにかく大急ぎで宿をきめ、商店街を歩いた。売り子などの顔はびっくりするほど白く、若い人はフランス人形そのものみたい。妻は、ロシア人形に目をつけ、そこで熱心な買い物が始まったのだが、8時ぴったりに店は閉まる。まだ店の前に並んでいるものを妻が買おうとしたら、もうおしまいと、少年からとビシャリと断られた。沖縄のように融通はきかない。ホテルはお湯が出て暖かかった。しかし、ガイドブックよりずいぶん値段が上がっている。私はあっという間に寝てしまったが、夜間激しい雷雨があったそうである。

7

翌朝まだ暗いうちにホテルを出た。7時発のバスで出発。11時過ぎ、バルセロナに戻った。大学のそばに日本人経営のペンションができたそうなので、そこに歩いて行った。お手伝いさんもお客さんもすべて日本人。妻は日本語で話せるところに来てとてもくつろいだようである。女の人が多い。留学とか、それぞれ目的を持っているようだ。

残り時間が少なくなって、あちこち動くよりバルセロナを見ようということになった。私としては行きたいところは行ったので、後は妻へのサービスのつもり。この日は、まずマドリードへの翌日の寝台券を買った。コインロッカーから荷物を出して宿に運び、それからピカソ美術館、海岸、コロンブスの像と回った。海岸際は、以前とまったく変わってしまった。以前は、屋台店がずらりと並んでいて、多くは時計等の質流れだった。そういう店が今はほとんどなくなって、きれいになった。ウソみたい。バルセロナはスーパーが多い。ここで食べ物を買って宿で食べる。

翌23日は、スペイン村から始めた。夕方サグラダ・ファミリアに行ったが、これはもう、すごいとしか言いようがない。てっぺんまで上ると、足ががたがたになった。夜10時15分発の夜行でマドリードに向かった。

翌朝、マドリードに着いてから、バスでトレドの町に行ってきた。ここは要塞であり、ナマ臭い。博物館とかも、戦争関係のものばかり。息子が人質にとられても降伏しなかった將軍をほめたたえているのにはびっくりした。我々の記憶に残ったのはそんなものより、例えば、バスターミナルで食べたイワシの酢づけ。これはうまかった。夜は、同宿になった上智大学スペイン語科の女子学生の方とマヨ広場で食事した。

25日午後1時10分発の飛行機で発って、モスクワ経由で26日の正午に成田に着いた。日本航空だが、イベリア航空との共同便で、機体や乗員もイベリア航空だった。

(1993・1・11 脱稿)